富山県造形教育連盟　会報　NO. 1

糸

令和４年５月３０日発行

富山県造形教育連盟会報「糸」について
富山県造形教育連盟は、幼、小、中、高の先生方が参加する、県芸術文化協会に加盟の文化振興の任意団体です。造形活動で大切にしたい発達段階という縦のつながりを考えることができる研究組織です。各校種の研究団体の横糸と、県造連の縦糸により、造形教育という織物が美しくつくり出されることを願い、会報を「糸」発行しました。本連盟の会員限定ページにて公開します。

理事総会あいさつ

富山県造形教育連盟　会長　　船木　英明

コロナ禍３年度、まだまだ感染症の流行を見ながらの事業開催となります。歩みを止めない、“つなげる”を合い言葉として、富山県造形教育連盟の事業も縮小しながらも継続してきました。しかし、このコロナ禍、学校や園の行事の中止や縮小、縦割り活動等の交流の停止、黙食等、仲間と共に学習する学校や園にとって大切な時間が奪い取られた形となっています。小学生の実態を見るに、これらの人との関わりの中での育ちの欠如による、自己肯定感が低い子供が増え幼稚化しています。また、年中、年少の発達段階の造形が小学生にも増えていることに驚きます。ものの見方は、造形活動だけで発達するのではなく、数多くの生活経験の中で成長してきていたことを改めて感じさせられます。

アフターコロナに向けて、この発達の遅れ、体験の不足が簡単に解消できるとは思いがたく、即効的な対応は、逆に子供たちの発達や成長をゆがめてしまいます。教員の今までの経験則からではなく、目の前の子供たちの様子を見ながら、丁寧に対応を考えていくことが必要となります。この富山県造形教育連盟は、幼・小・中・高の発達段階を学ぶ機会を得ています。今までの発達と２～３年遅れている子供たちの対応について、校種をまたいで学び合うことができます。本当の意味でのアフターコロナに向けて、子供たちの通常の発達に戻すまでの数年、じっくりと造形教育を窓口としながら、子供たちの復興を願いたいものです。

今年度は、富山県造形教育連盟の強みである、発達段階という縦糸を大切に、各校種の研究団体の横糸を織り込みたいと思っています。それぞれの校種がもつたくさんの財産を情報交換しながら、子供たちの正常な“復興”を合い言葉に、学び合えることを楽しみにしています。

実践紹介（小）

滑川市立西部小学校
小林秀史

第４学年図画工作科「撮ってびっくり！不思議な世界」の実践です。遠近法を使ってのトリックアート、フォトコラージュです。

今回の題材が、フォトレタッチを試みると、より子供たちの工夫や活動での思考が明確になる題材となる可能性を秘めていたり、自己ＰＲポスターにも発展しそうな題材です。中高でも楽しめそうです。

富山県造形教育連盟の事業予定

・造形教材研究会　　（８月１日：富山市立大沢野小学校）
・造形教育シンポジウム（12 月４日：パレブラン高志会館）
・造形教育作品展　　（11 月 19 日～12 月４日：富山県教育記念館）

感染症対策をとっての実施となります。会費（500 円）を徴収したいと思います。なお、富山県造形教育連盟の活動については、ホームページにて確認ください。　http://t-kenzouren.web.wox.cc/

会報「糸」原稿募集

長年積み上げられた富山県造形教育連盟の会員各位の実践という財産を、会報「糸」を活用し情報交換したいと考えています。コロナ禍での様々な障害による子供たちの発達のねじれをじっくりと元に戻すために活用できればと考えています。ご協力お願いします。読書紹介、実践紹介、随想等。

※　事務局安岡までデータでお願いします。
yasuoka-toshiyuki@toyama-city.ed.jp

おすすめの読書紹介１

富山市立堀川小学校　長谷川仁義

『図画工作指導テクニック 114』　荒治和幸　著

「先輩の先生に聞くイメージで本書を開いてみてください。」この本を開くとすぐにこう書いてあります。私は「子供が本当に楽しめる図画工作科の授業で子供を育てたい」と希望しながら、図画工作科についても子供についても分からないことだらけです。けれども、様々な指導テクニックを読むことで、スッキリとつながることや、「やってみたい」と思うこと、「ここに気を付けていきたい」ということが見つかりました。執筆された荒治和幸先生や４人の先生方の１１４のテクニックの奥にある、教育観を感じさせられました。「本書をいつも身近に置いて、少しずつ知識のストックを増やしていけば、図画工作の授業力がグンとアップするはずです！」とありますが、私もリュックに入れて持ち歩きたいと思いました。

荒治和幸先生は「先生のちょっとした工夫が図画工作が大好きな子どもを育てます。一番大切なことは、まずは先生自身が図画工作を楽しむことです。」と書いておられます。この本を通じて感じられるこの感覚を大切にしながら、困った時の助けとして何度もこの本を開きたいと思います。